様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ１２２９２

研究課題名（和文）双子の母親の妊娠期母児愛着促進と妊娠-育児期継続支援プログラムの開発と評価

研究課題名（英文）Development and evaluation of a program to promote maternal-infant attachment during pregnancy and to provide ongoing support during pregnancy and child-rearing for mothers of twins

研究代表者
佐々木　睦子（SASAKI, Mutsuko）

香川大学・医学部・客員研究員

研究者番号：９０４０３７８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：双胎妊婦の妊娠期から育児期までの継続的支援プログラムの開発と評価を目的に，双胎妊婦の思いと要望，および助産師の双胎妊婦ケアへの認識、双子を育てる父親の思い等を調査した．調査結果では，双胎妊婦にもっと全力で寄り添いたい助産師の思いが明らかになった．また、双胎妊婦と助産師の要望を取り入れて、双胎妊婦専用保健指導冊子を作成し、地域の多胎児支援関連施設に配布し活用してもらった．さらに，地域子育て支援団体と連携して，多胎児家庭交流会を開催し成果を得た．双胎妊婦に特化した保健指導内容の確立と、双胎専用外来窓口とオンラインを活用した支援システムのさらなる発展の重要性が示唆された．

研究成果の学術的意義や社会的意義
生殖補助医療の進歩は高齢出産の増加と多胎児妊娠に影響を与えている。双胎妊婦は不安が大きく育児不安も高く育児期の虐待リスクが大きいことから、妊娠初期からの母児愛着を促がす個別的支援が求められる。これまでは双子の育児期支援が中心であったが、本研究では妊娠期からの支援に焦点を当て取り組みであった。双子を含むハイリスク妊婦の支援には病院と地域が連携し、妊娠期から育児期まで継続したサポート体制確立が必要である。今後は医師とアドバンス助産師によるタスクシフト・シェアによるハイリスク管理への社会的需要はさらに高くなる。全ての女性がいつでもどこでも安心して妊娠・出産、子育てができる社会の実現に貢献できる。

研究成果の概要（英文）：The objective was to develop and evaluate a continuous support program for twin pregnant women from pregnancy to child-rearing. A survey was conducted on midwives' awareness of twin pregnant women's care and the thoughts of fathers raising twins. The results showed that midwives wanted to do more to support twin pregnant women. In searching for a work-life balance, the fathers of twins had imagined an ideal family raising twins. In addition, a pamphlet incorporating the requests of twin pregnant women and midwives was created and distributed to local facilities related to multiple birth support. In collaboration with local child-rearing support groups, a multiple birth family social event was held, with success. It is necessary to establish a dedicated outpatient service for twins and health guidance content. The results suggested the importance of further developing support systems that utilize online services.

研究分野：母性看護学

キーワード：双胎妊婦　双子子育て支援

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

## １．研究開始当初の背景

晩婚化に伴う生殖医療や不妊治療の進歩により、高齢妊娠や双胎妊娠が増加している。双胎妊娠判明後、双胎膜性種類に伴う危険性等の説明が医師からあり、妊婦は喜びと同時に不安を抱えることになる。双胎妊婦の不安は単胎妊婦よりも大きく育児不安も高いことから、虐待の要因となる。妊娠初期のつわりも重なり、この不安定な心身の状況はストレスとなり母児愛着と胎児発育に大きな影響を及ぼす。また、双胎妊婦の半数は不妊症治療後であり、高齢妊娠の可能性が高い。さらに，胎児との愛着は出産後の母児愛着に影響することから、妊娠初期から母児愛着が促されるよう、ひとりひとりのニーズと心身の状況に応じた個別的な支援が必要である。超音波装置の発達で胎児イメージはポジティブな影響を与えるが、2 次元画像では識別の困難性が指摘されている。4 次元超音波は立体的な動画であることから、妊婦の胎児イメージは容易となり、それは胎児愛着の促進につながる。さらに、超音波による立体的で動く画像は，胎動を感じる妊娠 16 週よりも早い時期から、双胎児の全身を描くことができ、胎児愛着を育む機会となる。

現在の双子を持つ母親への支援は主に育児期が中心であり、妊娠期からの母児愛着や個別的な支援に焦点をあてたものはみられない。妊娠中の双胎児との愛着促進は、出産後の双子子育てに主体的に楽しく取り組む姿勢を育む原動力となる。すなわち、妊娠初期からこそ双胎妊婦への個別的継続支援が不可欠である。

## ２．研究の目的

本研究では 4 次元超音波を活用した双胎妊婦の母児愛着促進の有効性の検証と双子家族支援と入院中の双胎妊婦訪問事業を確立させ、双子の母親の妊娠期からの母児愛着促進と妊娠-育児期の個別的継続支援プログラムの提案・評価をしていく。具体的内容を以下に示す。

（1）　双胎専用相談窓口の内容充実とふたごの母親学級開設に向けて準備体制を確立していく。双子支援に関わる地域ネットワークとの連携と双子家族交流支援を継続発展させ、妊娠期からの地域ネットワーク参画とサポート体制の方向性を明らかにする

（2）　入院中の双胎妊婦訪問事業を確立させ、実施・評価する

（3）　助産師を対象とした双胎妊婦支援の調査により，支援内容の実態と課題を明らかにする

（4）　4 次元超音波を活用した双胎妊婦の母児愛着促進の有用性を明らかにする

## ３．研究の方法

初年度は双胎妊婦専用相談窓口の設置充実と「ふたごの母親学級開設」に向けた準備に取り組む。双胎妊婦専用相談窓口設置の評価・充実に向けて、窓口を利用した双胎妊婦の感想や要望と満足度について調査していく。また双子支援に関わる地域ネットワークのとの連携による双子家族交流支援と、入院中の双胎妊婦訪問事業の確立にむけて準備を進める。翌年以降は、入院中の双胎妊婦訪問事業の実施・評価、および助産師の双胎妊婦支援の実態調査と 4 次元超音波を活用した愛着形成促進の有用性の検証継続をしていく。これらの実際から、双胎児を持つ母親の妊娠-育児期の総合的支援プログラムを確立する。（図 1）

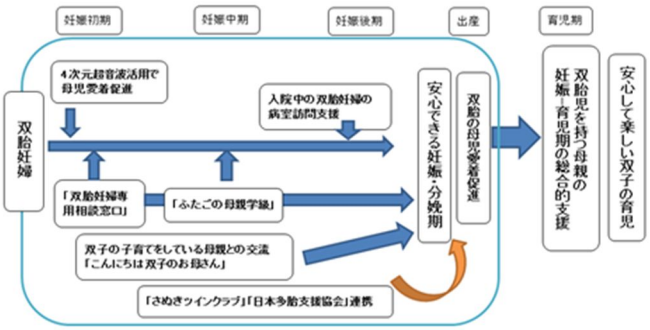



図 1 研究の概要

## ４．研究成果

目的に沿って、双胎専用相談窓口とふたごの母親学級で活用する双胎妊婦の保健指導媒体を作成した。冊子体の作成と中間評価をした後、実際に臨床現場で活用し始めた頃に covid-19 感染拡大が起こり、研究者と分担者および研究協力者の臨床現場への立入り制限が始まり、また、母親学級の一時中断から開催要領の変更が余儀なくされ、それに伴い研究進捗も滞った。さらに、双胎妊婦訪問事業に向けて病院内で各部門との調整準備に取り掛かっていたが、病院内の面会制限は次第に厳重となり、研究遂行に影響した。当時はインターネットや wi-fi 環境の整備も不十分であり、オンライン開催にも不慣れでその準備体制も追いつかなかった。臨床現場は業務に追われて余裕がなく、感染拡大への対応と研究推進の折り合いがつかない時期が長く続いた。様子を見ながら、感染が収束され以前の状況に戻ることを期待していたが、臨床現場での研究遂行は非常に難しく、様々な方法を試行錯誤してみたが、最終的に目標達成には至らなかった。そこ

で可能な範囲で研究を進めた成果についてまとめる。

（1）双胎専用相談窓口の内容充実とふたごの母親学級開設に向けて準備体制を確立していく

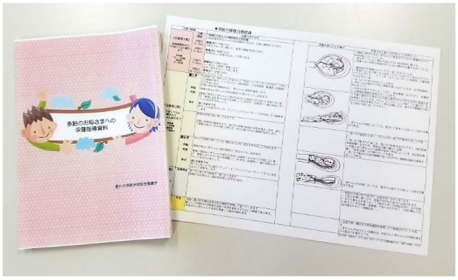
① 双胎妊婦の保健指導媒体の作成

外来通院および入院中の双胎妊婦とその支援に関わる人に向けた冊子,「多胎のお子様を育てるご家族へ」と「多胎育児お役立ち情報-かがわ版」（A5 サイズ）を 2 冊セットで作成した. セットにすることでそれぞれの更新が可能なものとした. まず研究協力施設の看護師長はじめ助産師達と、冊子の内容について繰り返し検討を重ねた。案作成後に双胎妊婦と助産師に感想や意見を聞いて反映させた。双胎妊婦から要望が多かった, 双子の抱き方, 同時授乳のポジショニング, 多胎育児準備用品チェックリスト, チャイルドシート等を盛り込んだ. 助産師の意見から, 分娩経過のイラストを大きくしわかりやくなるよう工夫した. また、文字は大きく読みやすい字体にし, フリーイラストを要所に配置し、色調も明るいイメージになるよう工夫した.

外来・病棟に冊子と同様の内容を拡大した A4 サイズファイル冊子を準備し, 保健指導時に妊婦と助産師が同じ目線で見ながらより信頼関係が深まるような冊子も併せて数セット準備した. セット冊子は協力施設である香川大学医学部附属病院, および県内多胎児支援団体（さぬきツインクラブ, NPO 法人子育てネットひまわり, 特定非営利活動法人ゆうゆうクラブ, 高松市保健センター）に配布した.

総数 200 セットの配布後は多くの双胎妊婦に適宜配布され, それぞれの施設で有効活用された。研究協力施設の通院中の双胎妊婦には助産師外来の保健指導時に配布され、妊婦と助産師で項目ごとに具体的な内容を確認しながら活用されていた。また、管理入院中の妊婦には必要に応じて受持ち助産師から配布され、個別的指導として活用されていた。多胎児支援に関わる団体等では、ツインズデー等に参加した双胎妊婦に適宜配布し、また多胎児子育て中の家族が気軽に閲覧できるように配置されていた。実際に支援に関わるスタッフも閲覧し活用していた。

配布後の調査結果では, 全員が役に立った項目は、「多胎妊娠のお産方法」と「多胎育児準備チェックリスト」であった。7 割以上が役に立った項目は、「多胎妊娠の場合に赤ちゃんやお母さんに起こりやすいこと」「母乳栄養と人工栄養・授乳方法」「子育て支援事業や制度の窓口一覧」であった。追加してほしい項目は、「入浴方法」「寝かしつけ」「お出かけ用バックの中身」であった。さらに冊子についての意見では、「母子手帳をもらうタイミングでこの冊子をもらえたらもっと役に立っていた」「管理入院初日にこの冊子をいただいたのですが, もう少し早くいただけると入院前にこのチェックリストを見ながら準備できた」「子育て支援事業や制度の窓口一覧はすごく役に立った。育休明け, 仕事復帰に対する不安もあったがいろんな支援があることが知れて少し不安が減った。他にもらった多胎育児情報冊子にもこのような記載はあまり見なかった」等であった。さらに要望として、「里帰り中の支援（上の子の預かり保育や里帰りでも受けれる制度, 子育て支援等）について詳しく教えてほしい」等があった。



②地域ネットワークと連携による双子家庭交流支援

特定非営利活動法人ゆうゆうクラブと連携して多胎児を持つ家族支援「ジュモクルズに乾杯！」を毎年開催した. 香川大学には後援申請し, 大学内の建物内で開催した.
毎年 8～10 組の多胎家族の参加があり, スタッフを含めて約 30～40 名規模の開催となった. また助産師を目指す看護学生や大学院生も積極的に参加し, 多胎家族や県内多胎支援団体の人々とも交流を図ることができた. 2020 年度はコロナ感染拡大防止のため, 大学とゆうゆうクラブ施設を zoom でつなぎ開催することができた. 参加者ニーズへの対応や PC 環境の整備等多くの課題があったが, 以後の開催には所属大学として関わることが難しくなった. 現在ゆうゆうクラブは, 随時「ふたごちゃん・みつごちゃんのいる家庭」を受け入れて規模を縮小して継続支援に取り組んでいる. また, 高松市多胎支援ツール作成委員会へ協力し, 双子育児のＤＶＤ作成に取り組んだ. ＤＶＤはより具体的な育児内容（入浴, 同時授乳, 買い物など）の実際編を映像化し, 育児者のヒントになるよう工夫されている.

（2）助産師を対象とした双胎妊婦支援の調査により, 支援内容の実態と課題を明らかにする

① 助産師の双胎妊婦支援の実態調査

入院中の双胎妊婦へのケアについて助産 師がどのように認識しているかを明らかにすることを目的に事態調査した。方法:A 県内の総合周産期母子医療センター2 施設で勤務する、助産師習熟段階レベルⅢを 認証された助産師 9 名を対象に半構造化面接を行い、質的帰納的に内容の分析をした. 香川大学医学部倫理委員会の承認後に実施した。結果：対象者 9 名の分析結果より, 助産師は【双胎妊婦は急変リスクが高いことを念頭におく】、【二児の児心音を短時間で正確に聴取することを最優先する】、【不快症状が強く現れやすいため意識し

て声を掛ける】、【双胎児への愛着を促すことを常に意識している】、【双胎妊娠の思いを受け止め、頑張りを認めて全力で寄り添いたい】等，9 カテゴリーが得られた。考察：助産師は双胎妊婦特有の身体的・精神 的負担を考慮して、安全・安楽な入院生活と分娩や育児をイメージすることと双胎児への愛着形成促進が重要と認識していた。結論：助産師は双胎妊婦にもっと全力で寄り添いたいという高い目標を掲げていることが明らかになった。双胎妊婦に特化した保健指導内容の確立やピアサポート導入等の必要性が示唆された。

② 双子を育てている父親の調査研究

目的：双子をもつ父親が，妊娠期から現在に至るまでどのように感じ考えて双子育児をしていたのか，その体験を明らかにする．方法：A 県内で双子の父親 10 名を対象に，半構造化面接法を行い，質的帰納的記述的に内容の分析をした．香川大学医学部倫理委員会の承認後に実施した．結果：分析結果より，19 サブカテゴリー，6 カテゴリーが得られた．双子をもつ父親は妻の妊娠が分かった時，夫婦ともに，【双胎妊娠の喜びと育児の不安】を抱いていた．そして，双子育児が始まると，【親のサポートと双子育児の情報で安心】と感じながらも，手に負えない育児をしている妻をみて，あらためて，【大変な双子育児をしている妻へのねぎらい】の大切さに気付き，【協力してやるしかない双子育児】を覚悟した．また，双子をもつ父親は，【仕事と育児の葛藤】を抱きながらも次第に，【双子の一人一人を大事にした子育てをしたい】という父親役割を認識する体験をしていた．考察：双子の父親は，想像していた以上に大変な双子育児を妻とともにすることで，妻の心身への関心と配慮の重要性を実感し，妻へのねぎらいの大切さに気付き，協力してやるしかない双子育児の覚悟を決めていたと考える．また，ワークライフバランスを模索しつつ，父親なりの双子一人一人の個性を大事にする理想の家族像への期待は，双子をもつ父親の価値観の変容と双子の父親の役割認識につながっていると考える．結論：双子の父親は妻とともに双子育児をすることで，ワークライフバランスを模索しつつ，父親なりに双子の個性を大事にする理想の家族像を描いていた．双子をもつ父親の体験は，価値観の変容と双子の父親の役割認識に影響していた．

③ 娘の里帰り出産をサポートした就労実母の思い

目的：娘の里帰り出産をサポートした就労実母の思いを明らかにする．研究方法：A 病院で出産した娘の里帰り出産を引き受けた就労実母 8 名を対象に，半構造化面接法を実施し，質的帰納的に内容の分析をした．香川大学医学部倫理委員会の承認を得て実施した．結果：就労実母は，娘の出産時に親から受けた支援を娘にも同じようにして力になりたい思いと同時に，娘をサポートする不安も抱いていたが，【家族に支えられながら娘の里帰り出産を引き受ける】思いに至っていた．実際に娘が里帰り出産で帰省すると生活全体が変わり，娘をサポートするための仕事の調整も必要となり，【仕事と娘へのサポートの調整は大変】であると感じていた．そして，娘が里帰り出産を終えると実母の生活は一変して元に戻り，【サポートを終えた後の寂しさと安堵】の思いを抱いていた．一方，里帰り出産を終えた後の娘からの感謝の言葉と子育ての様子から，【成長した娘の姿と役割を果たした満足】を得ていた．考察：就労実母自身の育児経験は，娘を助けたいという思いに繋がっていた．実際に，娘の里帰り出産を引き受けることは非日常であり，仕事と娘へのサポートの両立をするための葛藤を抱き，その調整は大変という思いに繋がっていたと考える．しかし，里帰り出産でのサポートを終えた後の感謝の言葉と娘の成長した姿を見届けることは，母親としての役割を果たした安堵と満足に繋がり，娘の第 2 子の里帰り出産を引き受けるために仕事を頑張るという生きがいに繋がっていたと考える．結論：就労実母自身の育児経験は，初めて出産した娘を助けたいという思いに繋がり，家族に支えられながら里帰り出産をサポートしていた．就労実母は，仕事と娘へのサポートの調整は大変であると感じていたが，感謝の言葉と娘の成長した姿を見届け安堵するとともに満足を得ていた．

④ 助産院宿泊型産後ケア利用後の母親の調査研究

目的：自己を確立する時期を迎えた母親が，助産院宿泊型産後ケアの利用を経て，育児に対してどのような思いを抱いているのかを明らかにする。方法：A 助産院の宿泊型産後ケアを利用し産後 3 か月を経過した母親 6 名を対象に半構造化面接法を行った。結果：母親は，育児に対して【助産師に相談できる心強さ】【産後休むことへの納得感】【母乳育児のこだわりからの解放】【人に頼ることの受容】【今でも感じる育児への不安】【子どもに向き合う気持ちのゆとり】【臨機応変に対応できる自信】の思いを抱いた。結論：利用中母親はいつでも【助産師に相談できる心強さ】を感じ，【産後休むことへの納得感】に至っていた。さらに，授乳への思いを否定されず受け入れてもらえたことで【母乳育児のこだわりからの解放】を強く感じていた。これらは【人に頼ることの受容】につながっていた。また，利用後に【今でも感じる育児への不安】を抱くことがある一方，人に頼ることで【子どもに向き合う気持ちのゆとり】を感じていた。【人に頼ることの受容】をした母親は，不安とゆとりを繰り返しながら【臨機応変に対応できる自信】を得ていた。

これらの調査研究から、助産師に支援を受けた双胎妊婦がどのように感じているのか、また双子の父親は双胎妊婦の支援をどのように感じていたのかが明らかになった。さらに、双胎妊婦は単胎児の妊婦より里帰り期間が長いことから、受け入れてサポートした就労実母の思いと今後

さらに活用が期待される助産院宿泊型産後ケアを利用した母親の思いを明らかにすることができた。就労しながら里帰りを受け入れる実母の増加は予測され、また、産後ケアシステムの推進は必須であることから、地域で子育てする母親の支援と課題を継続的に明らかにしていく必要がある。

(3)　今後の展望と課題

調査研究からは、助産師に支援を受けた双胎妊婦がどのように感じているのか、また双子の父親は双胎妊婦の支援をどのように感じていたのかが明らかになった。助産師は双胎妊婦にもっと全力で寄り添いたいという高い目標を掲げており、双胎妊婦に特化した保健指導内容の確立やピアサポート導入等の必要性が示唆された。双子の父親は、双子の個性を大事にする理想の家族像を描き、価値観の変容と双子の父親の役割認識に影響していることが明らかになった。また、双胎妊婦は単胎児の妊婦より里帰り期間が長いことから、受け入れてサポートした就労実母の思いと今後さらに活用が期待される助産院宿泊型産後ケアを利用した母親の思いを明らかにすることができた。里帰りを受け入れる実母の就労状況は今後も増加が推測され、産後ケア事業へのニーズはますます高くなると思われる。特に双子を育てる核家族の妊娠から産後までの支援ニーズは高いことが推察されることから、全ての地域で産後ケア事業の推進とさらなる経済的負担軽減が望まれる。

地域で双子を育てる母親や家族の支援には多様性と個別性があることから、柔軟に対応できる支援のあり方を継続的に明らかにしていく必要がある。

（得られた知見）

Covid19 感染拡大により、臨床現場での保健指導の在り方に変化が起こっている。妊娠中の母親学級、父親学級、両親学級、祖父母学級等、これまで様々な事情から参加が難しかった人たちも、オンラインを活用した、もしくはオンデマンドによる開催は、参加のハードルを下げることにつながり、仕事帰りや休日の時間を活用して、より多くの参加者が期待できる。このことは、双胎妊娠中の母親や父親のみならず、家族も含めた支援する多くの人と、正しい知識と最新情報の共有ができ、さらに家族ぐるみの交流は、その後の双子子育て期の交流にも発展し、安心して子育てできる環境につながると考える。

（今後の展望）

双子の妊娠期から子育て期の支援は、一つの支地域子育て援センターや病産院だけで行うものではなく、少数だからこそ、地域で連携して取り組める支援体制作りが求められる。オンラインによる支援を拡充することで、直接会うことはできないが、双方の負担軽減と効率の視点から、双子子育て経験者との交流は容易に可能である。時代的背景と妊娠出産世代の母親父親のニーズをうまく調整しながら双子家族の交流の輪を広げて行くことは母親の子育て安心感や虐待リスクの軽減につながることから、助産師にはそのコーディネータ的役割を担うことが求められる。具体的には、妊娠中のピアサポート事業（オンライン含）で１対１で双子子育ての経験者が寄り添う、助産院や病産院を活用した産後ケア事業の推進で妊娠中から切れ目ない双子子育て支援、双子に特化した子育てサークル事業の推進と経済的補助等があげられる。

これまで医師管理中心であったハイリスク妊婦の管理に、医師による診察とアドバンス助産師による助産師外来での個別支援を効果的に融合させる、すなわちハイリスク妊婦の妊娠初期からの管理に、医師とアドバンス助産師によるタスクシフト・シェアを発展させる社会的需要はさらに高くなると考える。

少子化に歯止めがかからない背景であっても、双胎妊娠の割合はほとんど変化していないことから、双子の妊娠出産世代の多様なニーズに寄り添い、オンライン等を活用した新しい形の双胎妊娠出産子育て期の支援の方向性と可能性をさらに追及していく必要性がある。

全ての女性がいつでもどこでも安心して妊娠・出産、子育てができる社会の実現が望まれる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>佐々木睦子，鈴木裕美，松下有希子，小松千佳 | ４．巻<br>11(1) |
| ２．論文標題<br>地域産科セミオープンシステムのモデル事業-助産師を中心とした妊産褥婦への切れ目ないサポート- | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>香川母性衛生学会誌 | ６．最初と最後の頁<br>3-10 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>小野愛実，石上悦子，佐々木睦子 | ４．巻<br>26(1) |
| ２．論文標題<br>娘の里帰り出産をサポーとした就労実母の思い | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>香川大学看護学雑誌 | ６．最初と最後の頁<br>51-63 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>佐々塚恵美，佐々木睦子 | ４．巻<br>26(1) |
| ２．論文標題<br>分娩を取扱わない開業助産師の活動に対する思い | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>香川大学看護学雑誌 | ６．最初と最後の頁<br>1-11 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>中澤恵美里，佐々木睦子，小松千佳，石上悦子 | ４．巻<br>26(1) |
| ２．論文標題<br>双子をもち父親の体験 | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>香川大学看護学雑誌 | ６．最初と最後の頁<br>37-49 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>赤垣衣美，佐々木睦子，石上悦子 | 4．巻<br>23 |
| 2．論文標題<br>入院中の双胎妊婦へのケアに関する助産師の認識 | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>香川大学看護学雑誌 | 6．最初と最後の頁<br>11-21 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>岡田風香、佐々木睦子、真砂友理、川田紀美子 | 4．巻<br>65 |
| 2．論文標題<br>助産院宿泊型産後ケア利用後の母親の育児に対する思い | 5．発行年<br>2024年 |
| 3．雑誌名<br>母性衛生 | 6．最初と最後の頁<br>81-87 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>岡田風香，川田紀美子，佐々木睦子 |
| 2．発表標題<br>助産院宿泊型産後ケア利用後の母親の育児に対する思い |
| 3．学会等名<br>第63回日本母性衛生学会学術集会 |
| 4．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>中澤恵美里，佐々木睦子，小松千佳，石上悦子 |
| 2．発表標題<br>双子を育てる父親の体験 |
| 3．学会等名<br>第62回日本母性衛生学会学術集会 |
| 4．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>佐々木睦子，阿部　慈，松木由美，中澤恵美里，小松千佳，石上悦子，花岡有為子，金西賢治 |
| ２．発表標題<br>多胎支援の冊子作成と多胎妊婦の感想 |
| ３．学会等名<br>第61回日本母性衛生学会学術集会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>赤垣衣美，佐々木睦子，石上悦子 |
| ２．発表標題<br>入院中の双胎妊婦へのケアに関する助産師の認識 |
| ３．学会等名<br>第60回日本母性衛生学会学術集会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>赤垣衣美，佐々木睦子，石上悦子 |
| ２．発表標題<br>双胎妊婦の入院中のケアに対する助産師の認識 |
| ３．学会等名<br>日本看護研究学会中国・四国地方会第33回学術集会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 石上　悦子<br>(Ishigami Etsuko)<br>(00624983) | 香川大学・医学部・准教授<br>(16201) | |

６．研究組織（つづき）

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 金西　賢治<br>(Kanenishi Kenzi)<br>(10263906) | 香川大学・医学部・教授<br>(16201) | |
| 研究分担者 | 花岡　有為子<br>(Hanaoka Uiko)<br>(10314931) | 香川大学・医学部附属病院・講師<br>(16201) | |
| 研究分担者 | 秦　利之<br>(Hata Toshiyuki)<br>(20156334) | 香川大学・医学部・客員研究員<br>(16201) | |
| 研究分担者 | 小松　千佳<br>(Komatu Chika)<br>(00817299) | 香川大学・医学部・助教<br>(16201) | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|